

合唱組曲「利根川源流讃歌」発表会

合唱組曲「利根川源流讃歌」発表・実行委員会

♪利根の流れのように水源地から 下流へと広がる合唱の輪

「利根川源流讃歌」発表会も、平成22年6月12日第10回発表会を迎えました。悠久なる利根の流れに比べたら10年などほんの一瞬に過ぎないのかも知れませんが、今ここで10年間を振り返ってみたいと思います。

1. 無からの出発

10年の間に合唱に参加して下さった人は発表会だけで延べ2,500人を越え、中でも10年間必ず参加している人は35人。10年前には歌詞も曲も合唱団もなかったものが、これまで水源地域でのイベントを加えると延べ6,000人以上の人々がこの歌を歌って下さった事になります。

2. 歌づくりの旅

1999年11月 大西進先生作曲の「荒川のうた」を川口のリアホールで歌わせていただいている時に、“大変だ、私は、私のふるさとの川 利根川の歌を作らなければ”と強く思ったのです。

“利根川の歌を作ろう”と心に決め、奥利根へ出掛けたのは 1999年12月でした。雪深い藤原で最初に出会ったのが「俺の仕事は俺一代」の本であり、人間国宝のような二人の古老、小野伊喜雄様（現在91才）と林義明さん（現在97才）でした。

仙太郎やかたの囲炉裏端でお二人の話を聞いているうちに「ダム湖に祈る」の詞が浮かび、続いて「利根源流の男たち」が浮かびました。

奥利根山岳会の会長でもある小野様に「利根川水源紀行」という貴重な本を戴き、父の本棚にあった 昭和2年刊「處女地征服 大利根水源紀行」と合わせ読み、私は利根川の水源地へどうしても行きたいという思いに駆られました。



仙太郎やかたの囲炉裏端にて

3. 利根川水源地・大水上山へ（愛犬クロと）

2000年8月8日 私は意を決して大水上山へ。十字峡の長い林道、丹後山登山口からの急登の連続、行きつ戻りつするクロに励まされてやっとの思いで九合目、そして丹後山避難小屋、そこからのチシマ笹の中の道は、まさに分水嶺の陵線上であり、天上の楽園、そして遂に「利根川水源」の碑と、万古不融といわれる三角雪渓。

♪はるかなる 山旅のはて 利根川水源
大水上山 われひとり 立つ♪
—奥利根の旅より—

♪はるかかなた 澄みわたる空のもと
上州最北端 利根川水源地
大水上山の 三角雪渓
太古からの 雪どけ水が
尽きることなく 湧き出すところ…
—利根川水源地より—

帰りは激しい雷雨の中の急降下で、私がクロを励まし、増水して荒れ狂う十字峡に怯え、アブの集中攻撃を受け、やっとの思いで車に辿り着く。13時間、だれ一人会う事ない山旅でした。



利根川水源の碑とクロ



第1回発表会



万古不融の三角雪渓

4. はじめての練習会

大水上山行から1ヶ月、「利根川源流讃歌」全12詞が完成。恩師大西進先生に作曲を依頼、それぞれの詞にぴったりの素敵な曲をつけていただきました。

2000年9月9日宝川の音楽室に「俺の仕事は俺一代」の主人公8人が全員集合し、「利根源流の男たち」の歌から練習を始めました。歌詞も楽譜も全部手書きのものでした。

この時はじめて行き合った誇り高き利根の源流の男たちは、自分の事が歌になった事への驚きと、とまどいと…そして喜びと…あの日の事は忘れることができません。



宝川音楽室にてはじめて集まった「利根川源流の男たち」

5. 国民文化祭 ぐんま2001参加

自主企画事業としての発表会を藤原で“自然を愛する人、山の好きな人、一緒に歌いましょう”の呼びかけで、源流讃歌のことが報道されると、思いがけない嬉しい知らせが届きました。

ポスター、チラシ、プログラム、歌集等を国土交通省や水資源機構で作ってくださるといふ、身に余る応援に感謝、感激でした。

また、合唱団員も、合唱経験者から、人前で歌うのは初めて、という老若男女140人が集まりました。はるか下流の伊勢崎少年少女合唱団、埼玉からは森の世界・緑の少年隊の親子なども…。

会場の体育館は、地元の林親男様を中心となり、町や地域ぐるみで、舞台づくり、客席づくり、仮設トイレの設置、駐車場、また当日は婦人会の皆様が郷土料理“ちぎりっこ”を大鍋で作り、来場者全員にふるまい、「利根川源流讃歌」名入りのスリッパが配られ（水資源寄贈）大小ののぼり旗20本が立ち（宝川寄贈）新緑の山奥の体育館に人々があふれ、“藤原にこんなに人が集まったのは初めてだ”といわれる賑わいでした。

藤原の小中学生による「大利根源流太鼓」で幕をあけ、幼児から90才になる方まで140人の大合唱が響き渡り、人々の善意が結集された発表会となりました。

6. 水源地サポート事業の支援

発表会を契機に、水資源の方の紹介でレポートを提出し、三年間の支援が受けられる事となり、お陰で第2回（前橋）第3回（沼田）第4回（渋川）と、新しい合唱団を加えながら年毎に盛大に、有意義な形で発表会を開催する事が出来ました。

7. 新しい合唱団の誕生

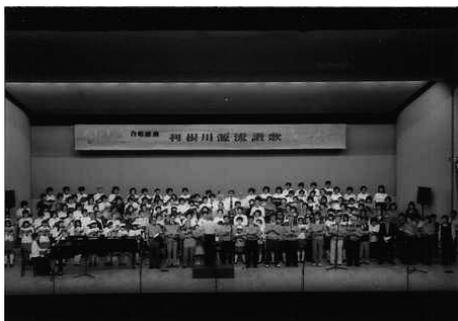
地域に由来あった合唱団のほかに、源流讃歌だけを歌いたいという合唱団が誕生しました。まず藤原では「これは自分たちの歌だからちゃんと覚えたい。」と熱心に練習を重ね「利根水源藤原合唱団」が誕生（平均年齢82才）。「榛名うぐいすの里合唱団」伊勢崎、前橋、渋川などに「利根川源流讃歌う会」が誕生。

8. 水資源機構グループの誕生

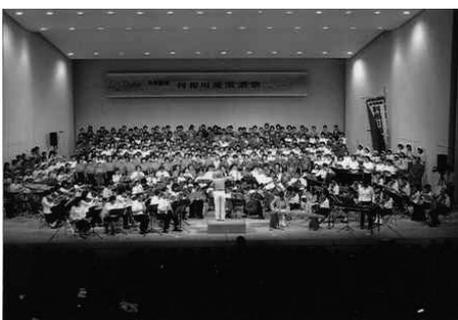
沼田総合管理所の会議室をお借りしての練習会には、地域の住民と一緒に職員の皆さんも参加、発表会には遠く転任された方も駆けつけて合唱に参加してくれ、実際に水やダムの仕事に携わる人々の使命感にあふれた歌声が力強く響き、この歌に新しい生命を吹き込んでくれました。現在も歌い続けてくださっています。

9. 群馬県“文化の芽”支援を受けて、オーケストラ総譜が完成。

スコア200頁、パート譜と合わせると500頁に及ぶオーケストラ総譜が、大西先生の手により完成しました。第5回には「伊勢崎ジュニアオケ」第8回には、群響OBによる「群馬室内楽奏団」の伴奏での大合唱が実現しました。



第4回発表会（渋川）水資源グループの合唱



第5回発表会（伊勢崎）ジュニアオーケストラの伴奏で

10. あこがれの谷川岳天神平での大合唱

谷川岳を“わが青春の山”と思っている人は沢山いるのではないのでしょうか。私もその一人。各地のホールで歌ってきましたが、この歌はやっぱり山で歌いたい。第6回天神平でのコンサートは雨のため、急遽室内になりましたが、“最高でした”“また天神平で歌いたい”という声に励まされ、第7回も天神平で。不安定な天気ながらも草原での大合唱が実現できました。霧の中に見え隠れする谷川山頂、朝日岳、そしてはるか大水上山も私達の歌声を聴いてくれたのでは…と胸が熱くなる発表会でした。

11. 関東建設弘済会の公益助成事業として

平成18年度から公益助成事業として認定され、だんだん額は少なくなりながらも、あたたかい支援をいただき、お陰で発表会を続けることが出来ています。私が10回までは、と言うと、いや20年も30年も続けてくださいと言ってくれます。今年いよいよ10年目ですが、私も体力の続く限り頑張りたいと思います。



第7回発表会 谷川岳天神平にて

**12. 水源地におけるイベントへの参加
(毎年7~8回参加しています)**

—主なもの—

- 1) 武尊山山開き (藤原武尊神社) H13より毎年、今年10回目



- 2) 利根川源流まつり (奈良俣ダム) H13より毎年、今年10回目



- 3) アドベンチャー・フェスティバル (水紀行館) H16、17、18、19、21 5回
4) 21世紀の森野外音楽祭 (21世紀の森) H15、16、17、18 4回



- 5) 水上町文化祭 (水上町観光会館) H13、14、15、16、17 5回
6) 藤原神社大祭 (藤原諏訪神社) H16、17、20 3回
7) 奥利根水源地見学ツアー (水源の森) H14、15、16、17 4回
8) 水源の森植林体験会 (水源の森) H13、14、15 3回



- 9) 水守の像広場植樹会 (藤原ダム湖畔) H14、15 2回
10) 矢木沢ダム見学会 (矢木沢ダム) H15、16 2回
11) ミズナラをふるさとへ (奈良俣ダム) H17、18、19 3回
12) 三菱UFJ水源の森楽習会 (湯ノ小屋) H18、19 2回
13) 水の週間記念式典 (東京・科学技術館) H15、21 2回



- 14) 奥利根水源憲章制定の集い (水上観光会館) H15

- 15) 奥利根水源憲章の碑・除幕式（矢木沢ダム）
H21



- 16) 湯ノ小屋物語（葉留日野山荘）H16
17) ねんりんピックぐんま（県民会館）H16
18) 谷川岳山開き（土合霊園地）H16
19) 第15回.全国ボランティア・フェスティバル
（月夜野）H18
20) 奥四万湖夏まつり（四万川ダム）H19.20
21) 利根川を守って半世紀2007.記念式典（藤
原ダム湖畔）H19
22) 県立吾妻高等学校開校記念日（吾妻高校）H20
23) 菌原ダム湖畔コンサート（菌原ダム）H20
24) 全国サミットin利根川（みなかみ町）H20
25) 尾瀬文学賞俳句大会受賞式（片品村）H21
26) 利根の吊橋・お別れ会（沼田市立西中学校）
H21



そして、平成22年度5月10日現在での予定

1. 6月 2日 高崎市役所、ロビーコンサート
2. 6月12日 第10回発表会
3. 6月27日 武尊山山開き

4. 7月17日 県立女子大学「坂東太郎」シンポ
ジウム

5. 7月25日 利根川源流まつりなどがあります。

これらのイベントは、その都度合唱団員に、日時・場所・曲目等をお知らせし、都合のつく人に集まってもらい、必要に応じては練習会も開き、合唱活動を続けています。そして、必ず参加してくれるのが「利根水源藤原合唱団」のお年寄りであり、事務局の「榛名うぐいすの里合唱団」のメンバーです。

13. 「奥利根水源憲章」と「奥利根水源憲章の歌」

奥利根山岳会の会長、小野伊喜雄様を中心に、制定委員会が発足（H13）みなかみ町・利根川ダム統管・水上森林管理センター・東電奥利根事業所・地元有志の皆さんにより、会議を重ね（私もメンバーとして参加）平成15年9月6日、制定の集いがみなかみ町観光会館で開かれた。同時に、猪熊道子作詞、大西進作曲「奥利根水源憲章の歌」全17章も披露され、第4回発表会からは、毎回歌い続けている。

第1章 県境の分水嶺高く連なりて 利根川水
源われらの誇り。
・
・

第17章 心ある賛同の輪より生まれたる 奥利
根水源われらの憲章

さらに平成21年9月27日、小野会長さんをはじめ、町・利根川ダム統管・水資源沼田総管・奥利根の水源を愛する有志の皆さんの力で、大きな自然石の「奥利根水源憲章」の碑が、矢木沢ダム、奥利根湖のほとりに建立されました。

14. 利根の吊橋 お別れ会

新しく造られるものあれば老朽化により撤去されるものもある…。

源流讃歌の中で愛唱されてきた「利根の吊橋」が撤去されるというニュースに、合唱団有志で橋の両袂で「吊橋の歌を歌おう。」という事になった。この事が沼田市文化協会の櫛淵光彦先生に伝わり、教育委員会を通して、この橋をかつて30年間通学橋として使ってきた西中学校の全校生240人と共に体育館で、お別れ会を行う事となった。

合唱団員は140人集まり従来の5番までの歌詞に6番を加え、別れを惜しんだ。

6番の歌詞 お別れの時はついに今
風雪に耐えたこの姿
心に焼きつけ忘れない
いつまでも歌い継がれる通学橋
いつまでも歌い継がれる利根の吊橋

15. 10年間の活動で変わらなかった事

1. 自然を愛する人、山の好きな人、一緒に歌いましょうの呼びかけで合唱団募集。
2. 林親男様が実行委員長として、町や支援団体、地元とのパイプ役として合唱団を導いてくれた事。
3. 「利根水源藤原合唱団」（平均年齢84才）が第1回の発表やすべてのイベントに参加、中でも最高齢者91才の小野伊喜雄様の天下一品の素晴らしいソロがあった事。
4. 発表会では必ず作曲者、大西進先生が指揮をして下さった事。
5. 地元藤原の子ども達を中心とした「大利根源流太鼓」の演奏が響いた事。
6. 伊勢崎少年少女合唱団「森の世界合唱団 みどりの少年隊」の子供達の参加があった事。
7. 作詞者である私が、いつも練習不足ながらアコーディオンと琴の伴奏をしてきた事。
8. 国土交通省利根川ダム統管・水資源機構沼田総管が年間を通してあたたかい支援を続けて下さっている事。
9. 50年近く前の教え子、小板橋武君が仲間とともに、舞台・音響・裏方の仕事をすべてやってくれている事。

10. 10年間、年会費大人1,000円、子供無料、そして入場料無料でがんばってきた事。

11. うぐいすの里事務局メンバーが、年間を通して、あらゆる面で労を惜しまず支えてくれている事。（自主バザーも年3回実施）

※2009年8月3日、事務局メンバー5人と共に大水上山に登れた事。

特記事項

第10回発表会には、関東最北端、利根川水源地に一番近い藤原小中学校全校生21名（小学生16名、中学生5名）が合唱に参加してくれます。

校長先生をはじめ、先生方に心よりお礼申し上げます。

16. おわりに

今回「利根川源流讃歌」第10回発表会の節目の年に「日本水大賞審査部会特別賞」を受賞できました事は本当に嬉しく、事務局を代表致しまして、心からお礼申し上げます。

実行委員長をはじめ、全合唱団員・作曲指揮者・応援者・支援団体・事務局メンバー・この活動に心を寄せてくださるすべての人々への賞として喜びを分かち合いたいと思います。

そして、この喜びと感謝の気持ちを原動力として、今後も地道に活動を続けたいと思っております。本当に有難うございました。

文責 「利根川源流讃歌」
事務局 猪熊道子

第10回発表会の開催によせて

この「利根川源流讃歌」は地域の皆様が自らの手で詩を作り、メロディーを作り合唱団を作り、利根川を愛する心を力強く無形の力として広く発信して頂いている姿は、本当に貴重であり素晴らしいものだと思っております。

近年、人々の生活による環境への影響が見直され、水や森林、生物が構成する豊かな生態系の保全が注目される時代となっております。今後は自然への敬愛と感謝の気持ちを持ち、地球の文化、伝統を継承し、水源地への理解を深める事が重要です。

～中略～

源流讃歌の活動につきましては、平成13年の第1回開催時の合唱団員は140名だったものが平成21年の第9回発表会では268人の参加があったと聞いております。大水上山の三角雪渓からの雪解け水が流れて大河利根川になるように、地道に、一步一步、着実に進んで活動していく事に重要な意味があり、そこに地域活性化の活路があると思います。

みなさんの活動継続こそが、下流域の方々への貴重なメッセージになるものですので、今後も利根川の流れのように永遠に活動が継続される事を祈念いたします。

国土交通省 利根川ダム統合管理事務所長
松 崎 實

第10回という大きな節目の発表会が盛大に開催されることに対しまして、まずは、敬意を表しますと共に、これからの益々のご発展を祈念させていただきます。～中略～

関係者の方々の継続への骨折りはいかばかりであったか、私には推測のしようもない程の継続的な努力が、つぎ込まれてきたのであろうと推察しています。

この継続は、歌の主題であります、利根川の永々とした水の流れの様相に大きくオーバーラップして感じられるのは、私だけではないのでしょうか。

「大河も水の一滴より」とも言われる言葉があります。「利根川源流讃歌」の発表会に当てはめてみますと、今回の盛況も初めに一滴ありきで、その一滴に水が集まるように人の集まりが始まり、悠々と9年という積み重ねがこれまでにあって、今回の

10回を迎えられたということだと思います。最初の一滴から今の盛況ぶりをご確信されていたのでしょうか。

「この大きな流れは、下流に向ってより大きな流れに成長し、利根川の恩恵をうけつつ生活をされている方々の利根川への愛着を、今後も増幅していく流れと必ずやなり続ける。

また、利根川を語る際には益々雄大で色の濃い背景となって成長していくと、会のご様子から私は確信しています。

独立行政法人水資源機構 前 沼田総合管理所長
田 中 靖

利根川源流讃歌を作曲し 今回の受賞を機に想うこと

作曲・指揮 大西 進

川のうたを作曲する（詩に曲をつけるのではなく新しいもう1つの別のいのちをうむ）ということは、人間の生活の中に川を大切にすることをとりもどすことである。

と言うのは近代、人はともすると川に背を向け、汚染水やゴミを捨てるなど、川をおろそかにするようになっており、その反省と川と人間の本来のあり方、大切にすることを取り戻すことだと思って作曲する。

この思いで北海道から沖縄まで、森や川のことを作曲し、子供や親・教師達と歌ってきた。

そんな中で猪熊道子さんと出会い、意気投合してつくったのが表題の12曲である。作曲のねらいの1つは当然、子どもや親子がうたう歌であり、昔のわらべうたや民謡のように人々の口から口へと歌い継がれるうたの作曲をすることである。

無から生じたこの12曲は幸いにも、年ごとに広がりを見せ「この思いに共感した」「この詞曲をうたいたい」「この曲をふるさとの歌にしたい」などと参加してくれる群馬県民がいる。その合唱を聞いてくれる人がいる。この作品のオーケストラ編曲も手がけ、一回から毎年、県内各地のコーラスの練習にもでかけ、本番の指揮も通し、みんなと共に歩んできた。

今年は10年目の節目であり、未来へのバトンタッチの節目でもある。

そこへ受賞の知らせがあり、一作曲家として身に余る光栄を覚えると共に、詞、曲、演奏、聴き手の四者が一つになったものにいただいたのではないかと思った。

「話し」は同じ話を二度すると「もう聴いた」といわれるのに対し、歌は何回歌ってもそうはならない。ここに歌の力がある。

心か心へつながるこの思いは、形となって見えなくとも、時間をかけ、世代から世代へと継がれていく中で、人の心が変わっていくものだと思っている。

今回の受賞を機に、深い感謝をこめて！

(作曲家 1931年三重県桑名市生れ 横浜市在住)